

龍の原型

王 震 中 著

西 山 尙 志 譯

一 龍に関する種類の推測

龍とはいったい何なのであろうか。少なくとも漢代ではすでに諸説紛糾しており、一致した見解がない。王充『論衡』龍虚篇では、ある人は龍は天の上で生活しているとして「以龍神爲天使」・「雲至而龍乘之」とあり、またある人は龍は水の中で生活しているとして「龍所居、常在水澤之中」とあり、または龍を「魚鱉之類」とし、または龍を「鱗蟲之長」とし、「世俗畫龍之象、馬首蛇尾」としたり、「屬馬蛇之類」としたりしている。

近代に入ってから、聞一多氏が『伏羲考』の中で、「龍のイメージは蛇の基礎の上に、獸類の四つ足・馬の頭・たてがみの尾・鹿の角・犬の爪・魚の鱗と鬚というものを受け入れた」と主張している。また、龍は「一種のトーテムであり、かつトーテムの中にのみ存在するものであって、生物界中には存在しない、一種の虚構の生物である。なぜなら、これは多くの異なるトーテムがミックスして出来た一種の総合體であるからである」と述べている。これと異なり、朱天順は『中國古代宗教初探』の中で、「空想の龍というこの動物神が生まれる契機・きっかけは、おそらく古代人が龍と似た動物を見たためでなく、^(注) 天空中の稻妻という現象を見たためにもたらされたものであろう」としている。この他、

ある人は龍は魚に起源があるとし、ある人は馬に起源があるとし、ある人は龍の原型は雲であるとし、またある人は「最も早い「龍」はワニである^(注2)」としている。一九八七年に河南省濮陽西水坡で六千年前のカラス貝の殻で龍をかたどったものが発見され、人々に龍の研究に對する新たな熱を巻き起こした。その後、新石器時代に龍の姿の遺跡遺物がまた中國各地で陸續と発見され、龍に關する検討がずっと續いている。

龍の問題はこのように諸説紛糾し、見通しもつかず、すっかりと中國文化上の「ゴールドバッハの豫想 (Goldbach Conjecture)^(注4)」となつてしまった。これらの推測の中には、確かにいくらか合理的なものを含んでいるものも少なからずある。筆者は、考古から発見された龍の姿と古文字中の龍の姿および關連する文獻の記載から見て、大きく分けて龍は足(爪)がある龍と足(爪)のない龍の二つに分類できると考える。我々は龍の原型に對する検討も、この二點に目を向けるべきであろう。

二 足がある龍とワニ

足がある龍としては、まず濮陽西水坡仰韶文化後岡類型から出土したカラス貝の殻で龍をかたどったものについて述べる必要がある。濮陽より發掘されたカラス貝の殻で龍をかたどったもの(圖1・2參照)には巨大な頭があり、上下の顎には鋭利なキバがあり、飲み込んだり吐き出したりしているけれどもスプーン状のヘビのしたではなく、凸目で、長い口で、頭から腹まではS字型の起伏を呈し、鬣の足に鋭利な爪、背中にはトゲがある。この姿は商周青銅器・骨器・玉器上の夔龍と完全に一致しており(圖3參照)、後世ひいては明清時代の龍の形とも非常に似ている(圖4參照)。ま

た、體がS字型を呈している以外では生物中のワニと非常に近く、ワニによく似た形である。より正確に言えば、蛟龍の如實な描寫であろう。『廣雅』釋魚に「有鱗曰蛟龍」とあり、『大戴禮記』易本命篇に「有鱗之蟲三百六十、而蛟龍爲之長」とある。また、『山海經』には「多蛟」という語が多く見られるが、郭璞注は「蛟似蛇、四脚、龍類也」「大者十數圍、卵如一二石甕、能吞人」としている。また、明代の陳絳『辯物小志』引『爾雅翼』に「鱷魚、南海有之、四足似鼉、長二餘丈、喙三尺、長尾而利齒、虎馬鹿渡水、鱷擊之、皆中斷。以尾取物、如像用鼻、往往卷取人家畜羊豕食之、亦能食人」とあり、蛟は鼉に似ているものの鼉ではない。鼉はワニの中でも性情が濃厚である。それに對し、蛟はイリエワニ (Estuarine Crocodile) であつて、ワニの中で最も凶暴な一種であり、特に繁殖の季節は更に凶暴となり、しばしば船を襲う古代の水路運行の大害であつた。中國の史書には「兩蛟挾船」・「兩龍負舟」といった記事が少なからず見られる。

生活習性の面では、『管子』形勢篇に「蛟龍得水、而神可立也」とあり、『楚辭』惜誓篇にも「神龍失水而陸居兮、爲螻蟻之所裁」とあり、『本草綱目』引『藏言』に「鼉、形如龍、聲甚可畏、長一丈者、能吐氣成雲致雨」とあり、『左傳』桓公五年に「龍見(現)而雩」とある。上述の龍の特性とワニとを對比したならば、きつと多くの點がピッタリと符號することに氣づくだろう。例えば、鱷は冬眠して春に目を覺ますが、龍は古い民謠に「二月二日、龍が頭をもたげる」とある。鱷は湖・海・河・淺瀬で生活し、雨が降る前に咆哮をあげ、聲は激しい雷のようである。そして「龍、水物也」とあり、その音は「隆隆」である。ここからわかるようにワニが具えているのは、大口で、巨大な歯が並び、鱗は堅く、四つ足で尾があり、卵を産んで冬にこもり、水陸兩棲で、雨の前に咆哮をあげ、その音は「隆隆」であり、「龍」と同音である、という特徴である。これらはみな龍の特徴と一致している。またワニは飼ひ慣らすことができ、『左傳』には中國古代に「豢龍氏」・「御龍氏」というものがあつたことを述べている。^(注6)『禮記』禮運篇にも「龜龍在宮、沼龍爲畜」

とある。従って、「龍Ⅱワニ説」は足のある龍について言うならば非常に理に適っており、「龍Ⅱワニ説」は足のある龍の生物学的意義の真相を明らかにしたのである。そして、濮陽西水坡の仰韶文化後岡類型から出土したカラス貝の殻で龍をかたどったものは、六〇〇〇年前に足のある龍がすでに存在していたことを示している。そして同時に、足のある龍が足のない龍から広がってきたものであるという可能性を排除した。

三 足のない龍と大蛇

再び足のない龍について言えば、その形は蛇身巨頭を呈し、あるものは角があり、あるものは角がなく、角があるものは「虬龍」といい、角がないものは「螭龍」といった。足がない龍の實物の姿は、すでに紅山文化の玉器(圖5参照)・安徽含山縣凌家灘遺址出土の玉器(圖6参照)・山西襄汾陶寺龍山文化出土の著名な蟠龍彩陶盤(圖7^(注7))に見え、また最近新しく発見された河南偃師二里头遺址の綠松石龍形器(圖8^(注8))にも見え、更には商代・西周・春秋時代の青銅器にも大量に見られる(圖9)。殷墟婦好墓出土の「蟠龍紋盤」中の蟠龍の姿もその典型的な代表とすることができよう。これらの足のない龍は、多くはトグロを卷いた状態であり、あるものはまるで大蛇(蟒蛇)のようであり、あるものは蛇身獸頭となっている。これらの足のない龍を古代人は「句龍」と稱した。『左傳』昭公二十九年に「共工氏有子曰句龍、爲后土」とあり、『山海經』大荒北經に「共工之臣名曰相繇、九首蛇身、自環、食於九土」とあり、『歸藏』啓筮篇に「共工、人面蛇身、朱發」とある。このように、句龍とはトグロを卷いたグルグル巻きの龍であり、その起源は自らトグロを卷いている蛇にある。つまり、「句龍」にせよ「蟠龍」にせよ、その實は大蛇の龍あるいは蛇獸合體の龍なのである。

四 龍と雷電

以上、ワニと蛇獸をもって足のある龍と足のない龍の生物形態と部分的習性を解釋した。しかし、『周易』にはすでに「見龍在田」・「或躍在淵」・「龍戰于野」という記載があり、「飛龍在天」といった表現がある。「飛龍在天」という神性は、足のある龍・足のない龍のどちらについても、水陸兩生類や爬蟲類という動物の性質をもって解釋することはできない。では、龍はどうして飛ぶことができるのであろうか。龍が雲に乗って天に昇るといふ神性はどのようにして生まれたのであろうか。鱗獸あるいは蛇獸は全く異なる幾つかの種類の動物で、どのようにして龍の生物的實體となることができたのであろうか。これは明らかに龍の起源に關する問題の中で鍵となるところである。

上述の疑問を解釋しようとするには、原始人の思考方式を理解する必要がある。原始人の考えにはすでに因果推理の論理的思考があり、また相互浸透し感應する（融即）考えの前論理的要素であり、更には模擬想像の内容もある。相互浸透し感應するという考え方は、原始人が人と自然、自然物と自然物という、つまりは全てを見ることができると見ることができないものの間では、みな相互に感應ないしは相互に轉化（相互變化）できると認識していることを指す。^(注) 模擬推理と想像方式という考えは、原始人が表面的なある一方面の相似のみによってある事物を強いて想像して別の事物とし、これをもって自然或いは人類社會の中のいくつかの現象を解釋し、そして神話の故事を形成するというものを指す。例えば、中國上古の先人たちは月の影を強いて想像してウサギやヒキガエルとせずして、一連の神話故事を形成したであろうか。龍が生じたのも同じである。地上のワニとヘビと天上のある自然現象を強いてイメージし、互いに融即し感應する考えの相互變化が行われたのである。

「龍」と「隆」が上古では音が同じであるということは、我々は知っている。「隆隆（ロンロン）」という音はすなわち雷の音である（『論衡』龍虛篇・雷虛篇に見える）。「隆隆（ロンロン）」という音とともに天空中に現われる稻妻が、もし地上のある動物と非常に似通っているとすれば、原始人はきつと自然に二者を同一視し、「隆隆（ロンロン）」という音からこれを龍と名付けたのだらう。「隆隆（ロンロン）」はただ雷の音を表わしているだけであるが、龍は隆の音であってまた象形文字でもあり、神靈の實態を表している。また、當時の中國は氏族部落が至る所に並び立ち分散しているという状況にあったので、ある原始的氏族部落はワニと雷電を同一物體と見なしてこれを「龍」と稱し、またある氏族部落は大蛇または蛇身に獸頭を加えたものと雷電を同一物體と見なしてこれを「龍」と稱した。そうして炎帝族中の共工氏のように、結果的に足のある龍と足のない龍の二大タイプを形成した。

龍の生成は、中國の遙か昔の先人が天空中の雷電と地上のワニと大蛇を一體とした結果である。この假説は、上述した推論以外にも神話傳説の中に根據がある。『左傳』昭公十七年に「大暉氏以龍紀、故爲龍師而龍名」とある。大暉氏はすなわち伏羲氏であり、^(注10)傳えられているところによれば、伏羲氏は雷神の子である。例えば『太平御覽』卷七八引『詩含神霧』に「大迹出雷澤、華胥履之、生伏羲」とある。更に興味深いのは、早期の神話の中では雷神のイメージは龍の形であるということである。『山海經』海內東經に「雷澤中有雷神、龍身而人頭、鼓起腹則雷」とある。ここでの「人頭」は雷神に對する人格化の結果であるが、「龍身」は雷神の實體である。この他、『論衡』龍虛篇には漢代の民間にはかつて以下のような迷信があったことが語られている。そこには「盛夏之時、雷電擊折破樹木、發壞室屋、俗謂天取龍……雷電擊折樹木、發壞室屋、則龍見（現）於外、龍見（現）、雷取以升天」とあり、この迷信の背後には、明らかに以下のようなイメージがある。それは、雷電は天が龍を取って、龍が天に昇る様子であり、天空中の稻妻を天上の龍（ワニ・ヘビ）が天空に昇るものとなった結果が、龍が天空中を飛ぶというさまなのである。

つまり、大暉氏と龍の關係の傳説はすでに龍と雷電の關係となつて表されている。大暉氏は雷神の子となり、雷神は「龍身にして人頭あり」となり、雷の音と「龍」は同音であり、雷電は天が龍を取つた際の稻妻の姿である。これらの様に、みな雷神は雷電の神と龍神が確實に重なり合つた一面であることを示している。よつて、足のある龍とは古い部落が天空の雷電と地上のワニを一體とみなした結果であり、足のない龍は他の部族が雷電と大蛇を同一物體とみなした結果である、と言える。このようであるからこそ、はじめて龍は天に昇ることができ、また淵に入ることができた。そしてまた、龍は沼に畜することができ、また野に戦うことができたのである。

五 龍は華夏族の農業の神である

龍の原型はすでに述べた通りであるが、では龍とは結局のところトーテムではないのであろうか。筆者が考えるに、「龍をもって紀す」大暉氏・共工氏といった先人について言えば、龍は自然と彼らのトーテムであり、その他部落の先人について言えば、彼らの崇拜する龍は必ずしもトーテムをもって祖先と對應していないのである。例えば濮陽西水坡仰韶文化45墓の中で、墓主の體の東側に龍を置き、西側に虎を置いていた現象は、トーテム崇拜の反映とすることはできない。なぜなら、トーテムとは個人のトーテムであらうと氏族のトーテムであらうと、みな自然物或いは自然現象からのみ取るものであるからである。また、一つの氏族中にも様々なトーテムがあつてもよいが、しかしある個人について言えば一つの個人的なトーテムがあるだけだからである。そして、二つの氏族が連盟している場合、二つのトーテムを並列してもよいが、しかし二つの氏族のトーテムは一人によつて統率することはできず、これは同一器物上に並べて飾ることができても、一個人の身に集中することはできないからである。氏族の融合によつて多くのトーテムが混ざり

合うと、混ざり合った後の新しい崇拜物は間違いなく元々あったトーテムの多くの要素を含んでいる。しかし、これは新しい共同體によって出現したのであって、元々の多くのトーテムが整然と並列していたものではない。よって、45號墓墓主の身邊の左に龍・右に虎という現象は、けっしてトーテム崇拜の現象ではないのである。恐らくは、中國古代の最も早い「左に青龍、右に白虎」という觀念が現われたのであろう。墓主が東に龍を置く意味は、東方は蒼龍が宿る春というものであり、西側に虎を置く意味は、西方は白虎が宿る秋であるというものである。四象という方位上、龍は東で虎は西であり、神性上は龍は春神・生き神で、虎は秋神・死に神である。墓主人の左に龍、右に虎があるのは、生殺の大權を握っていた人物であることを示している。^(注1) 45號の東・西・北の三面の收納物には殉死體があるが、これは墓主人が決して一般人ではなく、身分相當の部落首領であり、同時に巫師という職業であることを示している。

この他、45號墓に關する以外の地層から、他にも二カ所でカラス目の殻を並べた龍・虎の圖形があり、その中の一カ所には龍の背に人が一人乗っている。また戰國期に屬する長沙子彈庫帛畫中では、死者も龍に乗っている。このようにして、45號墓墓室内の龍虎圖について他の解釋を打ち出すことができる。それは、墓室外の人が龍の背中に乗る龍虎圖と同じく、これはみな死者の靈魂がまさに天へ昇ろうとしている或いはまさに天へ昇っているところを象徴したものである、ということである。龍は「春分而登天、秋風而潛淵」であるので、傳えられているところによると昔の神人は多くが龍に乗っている。例えば、『山海經』中に祝融が「乘兩龍」、夏后啓が「乘兩龍」、蓐收が「乘兩龍」、勾芒が「乘兩龍」とある。また、『大戴禮記』五帝德篇では「顓頊乘龍而至四海」や「帝嚳春夏乘龍」などとある。また龍虎が並列してこれに乗って引き連れさせる様子は、古籍中に見ることができ、例えば『楚辭』惜誓篇に「登蒼天而高舉兮、歷衆山而日遠。觀江河之紆曲兮、離四海之霑濡。攀北極而一息兮、吸沆瀣以充虛。飛朱鳥使先驅兮、駕太一之象輿。蒼龍蚺虬於左驂兮、白虎騁而爲右駢……」とあり、これはまさに蒼龍を駕し白虎に乗り、天空に遊んでいる。つまり、45號

墓墓主の身分は恐らく部落首領兼巫師であるために、當然龍に乗って天に昇ることができ、人と神の間の関係を疎通させることができ、更には神の代表となることができるのである。

龍が中國上古の重要な崇拜対象となったのは、當然ただ大暉氏・共工氏などの部落のトーテムであったためだけでなく、さらに主にはこれが中國農業文化の中で春・生・雨・水を表し、極めて生命力・パワー・變化に富んだ農業の神であったからである。

古代人は二十八宿中の角亢氐心房尾箕の七宿を青龍（或いは蒼龍）と稱し、その中の房心尾の三宿を大辰と稱した。『爾雅』釋天の郭璞注に「龍星明者以爲時候、故曰大辰。大火、心也。在中最明、故時候主焉」とあり、『說文』に「辰、房星、爲民田時者」また「辰者、農之時也。故房星爲辰、田候也」とある。つまりは、青龍と稱される七宿中の大辰がいったん現われると、春がやって来て、萬物の生命力もやって来る。そしてこの時がまさに初カミナリの時期なのである。『禮記』月令篇に「仲春之月……雷乃發聲」とあり、『莊子』にも「蟄蟲始作、吾驚之以雷霆」とある。故に『說文』に「龍……春分而登天、秋風而潛淵」とあり、古い民謠に「二月二日は龍の頭がもたげる」とあるのである。よって、間違いない古代人の目には、龍の出現は春と生命力の到來を象徴しているように映っているのである。

龍はまた雨と水を掌る神靈である。『左傳』昭公二十九年に「龍、水物也」とあり、桓公五年に「凡祀、啓蟄而郊、龍見（現）而雩」とある。雩は雨の神を祭る祭名であり、ここでいう龍は恐らく星の名を指している。しかし、この中から我々は龍神が雨を降らすはたらきがある神として祭られていることがわかる。

龍はまた土地を掌る神であり、例えば『左傳』昭公二十九年に「共工氏有子曰句龍、爲后土、后土爲社」とある。つまり、最初の龍神は一部の部落にトーテム神として信仰された以外は、黃河・長江・遼河等流域の諸農業民族によって農業神として信仰された。後に時間の推移に伴って、人々は農業文化の需要によって、龍にますます多くの神性を與

えていき、最後にはとうとう萬能の神と天意の象徴となってしまう。龍と皇帝權力の結合については、更に秦漢以降の事情に属するので、これについてはまた別の機会に論じたい。

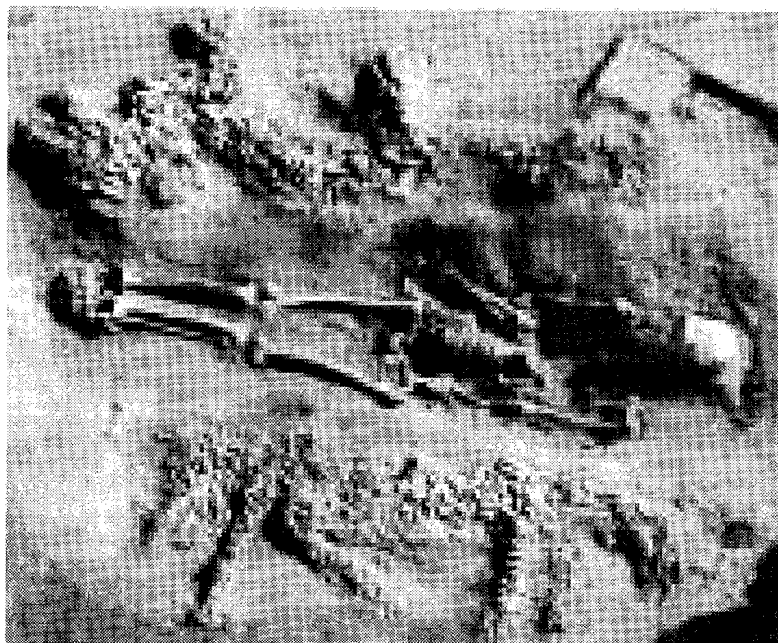


圖 1

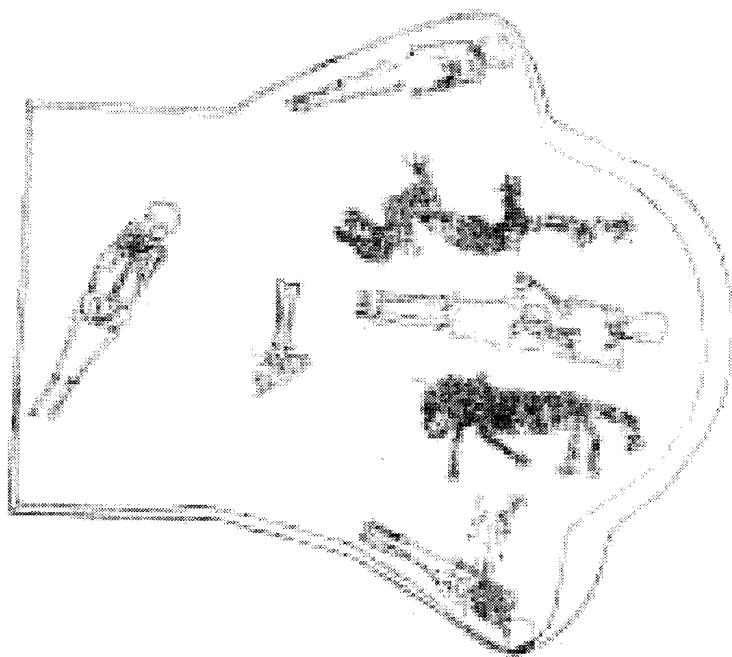


圖 2

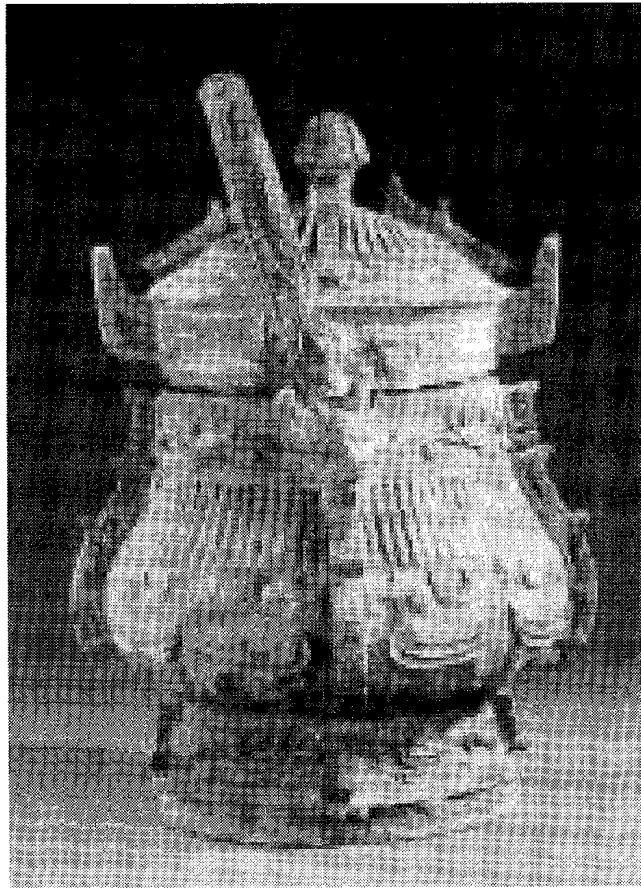


圖 3

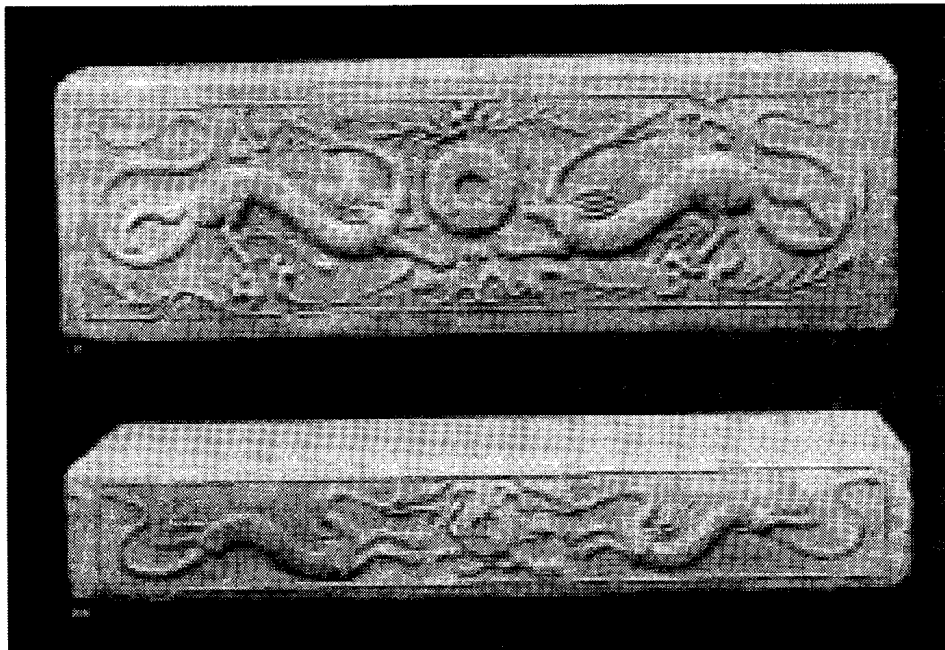


圖 4



圖 5

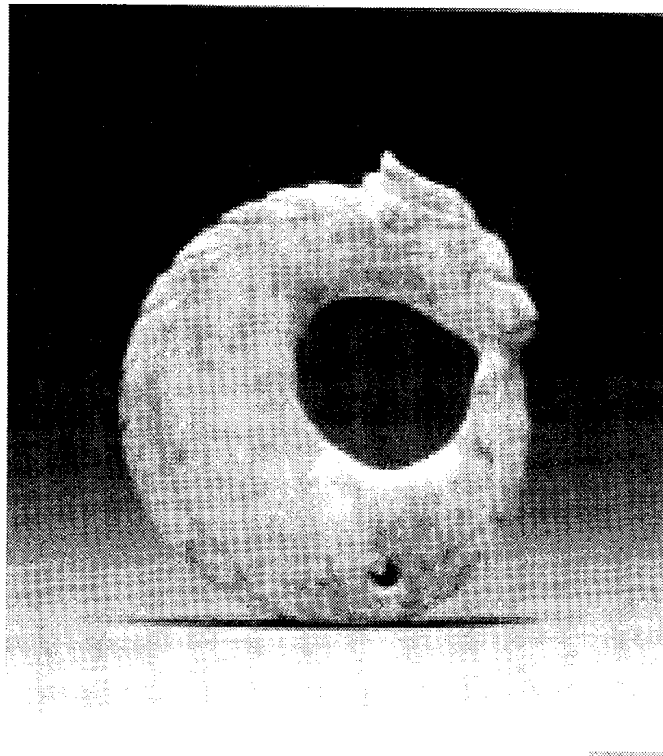


圖 6

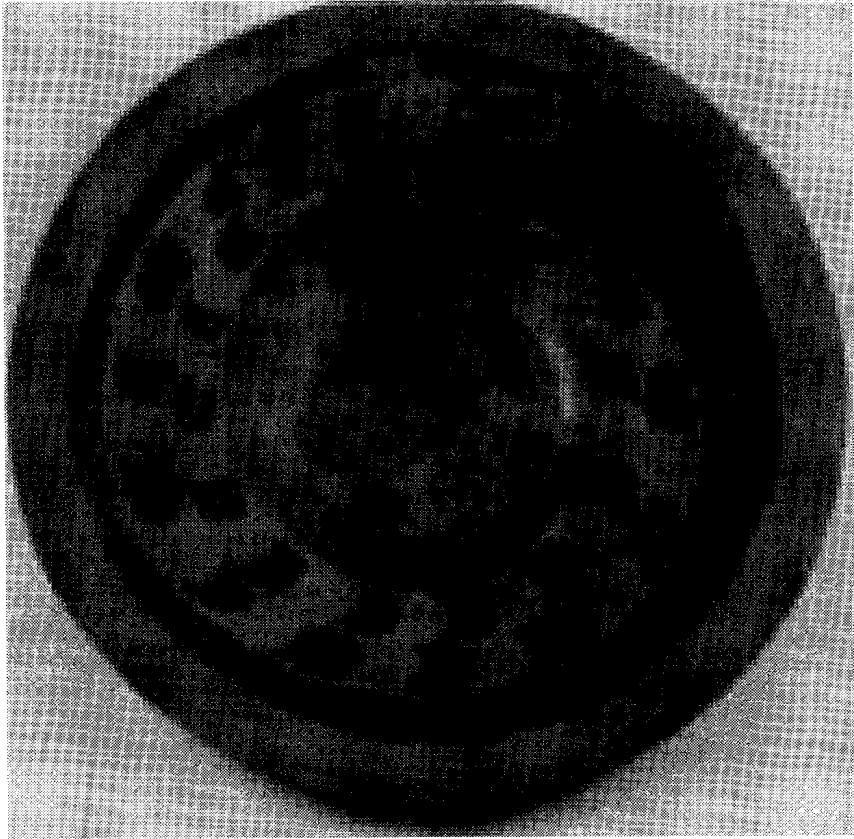


圖 7

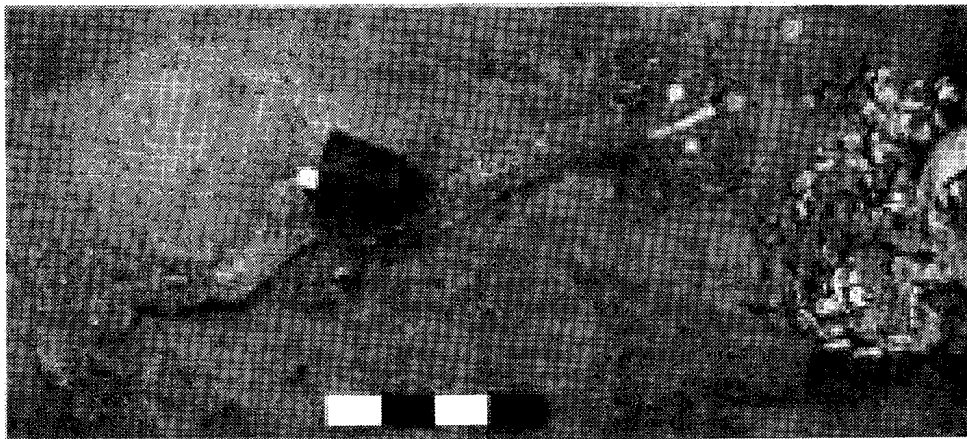


圖 8

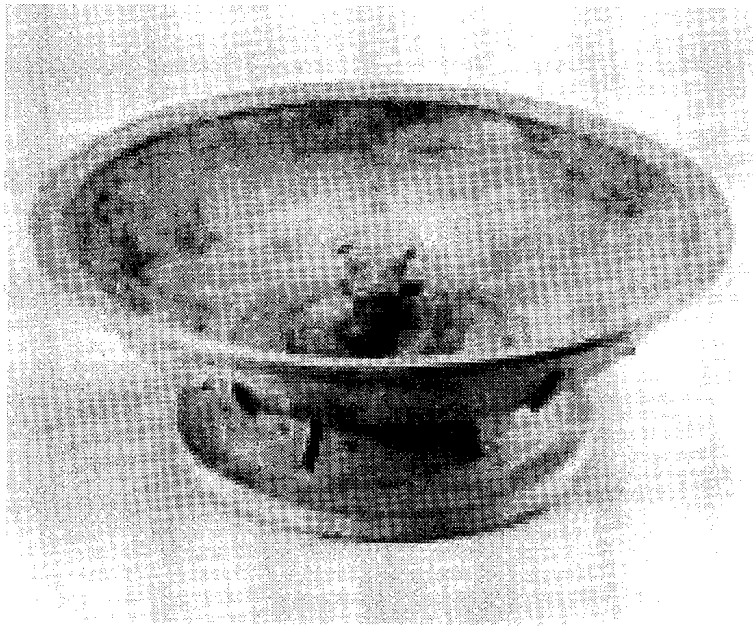


圖9



圖10

- 注
- 1 朱天順『中國古代宗教初探』（上海人民出版社、1982年）102頁參照。
 - 2 祁慶福『養鰲與參龍』（『博物』、1981年第2期）
 - 3 濮陽市文物管理委員會等『河南濮陽西水坡遺址發掘簡報』（『文物』1988年第3期／『中原文物』1988年第1期）
 - 4 譯者注：プロイセン生まれの數學者ゴールドバッハが1742年に發表した豫想。この豫想は現在も完全には解決されていない。
 - 5 『左傳』昭公二十九年
 - 6 『左傳』昭公二十九年
 - 7 『考古』1983年第1期、圖版肆
 - 8 『考古』2005年第7期、圖版陸・柒
 - 9 (佛) 列維－布留爾『原始思維』（商務印書館、1987、37、38頁）。譯者注：日本語版はリュシアン・レヴィ・ブリュール (Lucien Levy-Bruhl) 『未開社會の思維（上・下）』（山田吉彦譯、岩波文庫、2003年2月）
 - 10 『世本』帝系篇（清張埴後集補注本）に「太昊伏羲氏」とある。
 - 11 胡昌健『論中國龍神虎神的起源』、『說文』に「龍……春分而登天」とあり、古謠に「二月一日は龍が頭をもたげる」とあるのは、みな龍神も春天を掌る神であることを示している。『爾雅』釋天に「秋爲白藏」とあり、『史記』天官書に「下有三星、兌曰罰、爲斬艾事」とあり、『正義』に「罰、亦作伐」とある。また、『國語』晉語二に「晉公夢在廟、有神人面白毛虎爪、執鉞立於西阿……覺、召史噐占之、對曰、「如君之言、則蓐收也、天之刑神也」とあり、『注』に「蓐收、西方白虎金正之官也」とあり、白虎は秋神・刑神・死に神となっている。

附記

大東文化大學と中國社會科學院歷史研究所は二〇〇六年十二月に交流協定を締結した。そこで關係の最も深い大學院文學研究科中國學專攻において歴史研究所の王震中教授を招聘して二度の講演會を開催した。一つ目の講演は二〇〇七年七月一〇日（火）に「殷代王都的“社”與“左祖右社”之管見」と題して開催され、二つ目の講演は七月一三日（金）に「龍之原型」と題して開催された。ここに掲載の論文は二つ目の論文「龍之原型」の日本語譯である。